

## 色彩特性と物理的特性との関係 III

松崎 俊之\*

### The Relation between Color Properties and Physical Properties III

Toshiyuki MATSUZAKI<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup>*Department of Human Culture, Faculty of Human Studies,  
Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki 986-8580, Japan*

#### 4 色彩に関する素朴实在論(原初主義)的な理解と色彩に関する関係主義的な理解とを調停する試み

本稿1においてわれわれは、本稿における色彩に関する基本理解として以下の六点を挙げた(松崎[2017]: 43-5)。

- (1)色彩は内在的特性である。
- (2)色彩は単一的・モノダの特性である。
- (3)色彩は実在的特性である。
- (4)色彩経験は表象的である。
- (5)色彩の中核に位置するのはある種の現象的特性(クオリア)である。
- (6)色彩は関係的特性である。

1にも述べたように、このうち(1)から(5)の理解は、色彩に関してわれわれが抱く素朴实在論(原初主義〔primitivism〕)的な直観の内実をなすと言えるが、こうした素朴实在論(原初主義)的な理解と(6)の関係主義的な理解とは、少なくとも直接的には相容れないものと考えられる。

本章の課題は、色彩に関するこれら二種の理解を調停するための方途を探ることにあるが、この課題に取り組むにあたっては、コリン・マッギンがその論考「色彩に関するもう一つの見方」(McGinn [1996])に示した議論がきわめて示唆に富むものと言える。そこで本章では、まずマッギンの議論を批判的に再構成しながら詳しく検討することで、そこから本課題に取り組むための理論的枠組みを得ることに努め(4.1)、ついでそれを基盤として色彩に関する素朴实在論(原初主義)的な理解と関係主義的な理解とを調停する試みとして、色彩に関する存在依存関係主義理論をあらたに提案する(4.2)。

#### 4.1 マッギンのスーパーヴィーニエンス傾性理論

マッギンが McGinn [1996]においてあらたに提唱する色彩哲学上の理論は「スーパーヴィーニエンス傾性理論(supervenience dispositional theory=SDT)」と称されるものであるが(McGinn [1996]: 545)<sup>(1)</sup>、マッギンがSDTをあらたに打ち立てる経緯とその背景に潜む問題意識について簡単に触れておくならば以下ようになる。

マッギンは前著『主観的観点—第二性質と指標的思考』(1983)では大筋において色彩に関する傾性主義(dispositionalism)の立場に与し、そこから色彩に関するいくつかの重要な知見を導き出したのであるが(McGinn [1996]: 537, cf. McGinn [1983]: 5-15)、McGinn [1996]においてはMcGinn [1983]で採った傾性主義の立場を撤回し、傾性理論のもつ長所を生かしながらも、それが必然的に蔵する諸問題を回避することで、色彩に関する素朴实在論(原初主義)的な描像を傾性理論によって基礎づけることを目指して(McGinn [1996]: 538)、あらたにSDTを打ち立てることになる。

本節では、マッギンがSDTの樹立にいたったこうした経緯に即して、まずは色彩に関する傾性理論(dispositional theory=DT)の基本構制を押しえたうえで(4.1.1)、その長所と問題点を確認し(4.1.2)、ついでDTの蔵する問題を回避するひとつの方途としてあらたに提案されたSDTについて、その基本構制を捉えることにする(4.1.3)。

##### 4.1.1 色彩に関する傾性理論の基本構制

色彩に関する傾性理論(DT)について論ずる

<sup>\*</sup>石巻専修大学人間学部人間文化学科

### 色彩特性と物理的特性との関係 Ⅲ

にあたって、まずは傾性理論一般にとってその中核をなす「傾性 (disposition)」概念について簡単に押さえておくことにしよう。

傾性とは対象のもつ潜在的・可能的な特性を意味する。たとえば「食塩(=塩化ナトリウム NaCl)は白い」と言われるときの「白い」という語が食塩のもつ顕在的・現実的特性を表わしているのに対し、「食塩は水溶性をもつ」と言われるときの「水溶性 (solubility)」という語は、食塩のもつ潜在的・可能的特性を表わしている。あるものがある顕在的・現実的特性をもつということは、それが現にある特定の状態にあるということの意味だが、一方あるものがある傾性をもつということは、それがあある特定の(諸)条件のもとに置かれたとするならばあある特定の状態になる(傾向をもつ)ということの意味する。したがって、傾性は反事実条件文 (counterfactual conditional) をもとに分析が可能となる。たとえば「食塩は水溶性をもつ」という命題は「ある標準的な諸条件のもとで食塩を水に浸すならば、食塩は水に溶ける」という反事実条件文と等値であると見なされるのである (Choi and Fara [2014]: 5-6)。

以上の点を踏まえて傾性概念一般について捉えるならば、傾性とは対象が潜在的・可能的にもつ、ある条件(もしくは条件群)のもとである特定の事態を引き起こす(傾向的)特性であるということになる<sup>(2)</sup>。

この傾性概念を核として構成される色彩に関する傾性理論の基本的主張としてマッギンは以下のものを挙げる。

ある対象がある色彩特性を例化する (instantiate) とは、正常な知覚者 (normal perceivers) に対して正常な諸条件 (normal conditions) のもとでその対象がその[色彩]特性を帯びるといふ経験を引き起こす傾性をその対象がもつ[ことを意味する]。

(McGinn [1996]: 537. [ ] 内は松崎による補筆。以下の引用においても同様)

この色彩に関する傾性理論の基本的主張のもとに傾性理論にもとづく色彩の定義を示すならば、以下のようになる。

【DCDT1】色彩 C = df. 正常な知覚者 NP に対して正常な諸条件 NC のもとである対象 O がその色彩 C を帯びるといふ経験を引き起こすその対象 O もつ傾性 D

この【DCDT1】には以下に挙げる二つの問題点が認められる。

(1) 【DCDT1】においてまず問題となるのは、あらためて言うまでもなく「正常な知覚者」と「正常な諸条件」である。すなわち、何をもってそれらが「正常である」と見なされるのか、「正常な知覚者」と「正常な諸条件」を特定することはそもそも可能なのが問題となるのである。「正常な知覚者」と「正常な諸条件」の特定に関しては否定的な立場を採る論者もいることから (Hardin [1988/1993]: 67-82, Cohen [2009]: 29-33)、その定義のうちに「正常な知覚者」と「正常な諸条件」を導入することは控え、より中立的なかたちで傾性理論にもとづく色彩の定義を定式化することが必要となる。

(2) 【DCDT1】によれば、傾性 D によって引き起こされるのは「対象 O が色彩 C を帯びる」といふ命題的经验ということになるが、食塩のもつ「水溶性」といふ傾性が引き起こすのは「食塩は水に溶ける」といふ命題的事態ではなく、あくまで「水に溶ける」といふ化学的反應であると同様に、傾性 D は本来、「対象 O が色彩 C を帯びる」といふ命題的经验を引き起こすものではなく、色彩 C と直接的に関連づけられるような感覺反應、たとえば「C に見える」あるいは「C に感じられる」といふ感覺反應を引き起こすものと考えられる。

以上の二点を踏まえ、傾性理論にもとづく色彩の定義を再定式化するならば、以下の【DCDT2】が得られる。

【DCDT2】色彩 C = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる(たとえば「C に見える」、「C に感じられる」) ような感覺反應 SR を引き起こす対象 O のもつ傾性 D

この【DCDT2】をもとに、いま試みに傾性理論にもとづく「赤」の定義を定式化して示すならば、以下のようになる。

【DRDT】赤 = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して赤と直接

的に関連づけられる(たとえば「赤く見える」、「赤く感じられる」)ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ傾性

#### 4.1.2 色彩に関する傾性理論もつ長所と問題点

さて色彩に関する傾性理論は、長所と問題点とをともに具えると言えるのであるが、まずその長所について見るならば、DT のもつ際立った長所としてマッギンは以下の点を挙げる。

この〔色彩に関する傾性〕理論のもつ顕著な長所は、色彩帰属の主観性と相対性を捉える一方で〔…〕、色彩を帯びているのは外界の対象それ自体であることを認める点にある。この理論は、色彩を感覚に依存する (sense dependent) とともに、対象を性格づける (object qualifying) ものと見なすのである。

(McGinn [1996]: 537)

マッギンがここで指摘している色彩に関する傾性理論のもつ長所は、それを一言で言い表わすならば、色彩を主観的側面と客観的側面との両面から捉えることを可能にするという点にあると言えるが、この点を上に示した【DCDT2】に即して確認しておくならば以下ようになる。

【DCDT2】によれば、「色彩 C と直接的に関連づけられる(たとえば「C に見える」、「C に感じられる」)ような感覚反応 SR」はあくまで「色彩知覚システム S を具えた主体に対して」引き起こされるのであるが、ここからも見て取れるように、傾性理論は色彩のもつ主観的相対性を明確に捉えていると言える。他方で【DCDT2】によれば、色彩 C とは要するに傾性 D であるということになるが、この傾性 D はあくまで対象 O のもつ特性であると解されることから、色彩 C は対象 O のもとに基礎づけられ、したがってそのかぎりにおいて対象 O に確然と繫留されることになる。この点に鑑みるならば、傾性理論は色彩のもつ客観的側面についてもこれを明確に把握していると見なされることになる。

このように色彩に関する傾性理論は、色彩を主観的側面と客観的側面との両面から捉えることを可能にするという点で際立った長所をもつと言え

るが、しかしながらその一方で、この理論は必然的にそれ自体を破綻させかねない深刻な問題を蔵することになる<sup>(3)</sup>。

マッギンはそうした問題として四つのものを挙げるのだが (McGinn [1996]: 540-4)、以下ではそれらの問題について順に見ておくことにしたい。

(1)傾性と色彩とは本質的に別個の特性である

【DCDT2】から明らかなように、傾性理論によれば色彩とは要するに傾性であるということになるが、色彩が可視的な特性であるのに対し、傾性は本来潜在的・可能的な特性であり、そのかぎりにおいて不可視的な特性にとどまることから、両者は本質的に別個の特性であると見なされる。

色彩が可視的な特性であるとは、これを別な角度から捉え返すならば、色彩が視覚(さらに特定するならば色覚)によって感受される現象的特性(クオリア)であるということの意味し、したがって逆に言えば、傾性が不可視的な特性であるとは、傾性が現象的特性(クオリア)ではないということの意味する。

本章冒頭に再掲した本稿における色彩に関する基本理解のひとつに(5)「色彩の中核に位置するのはある種の現象的特性(クオリア)である」という理解があったが、この理解が(1)から(4)までの理解とならんでわれわれが抱く素朴实在論(原初主義)的な直観の内実をなすものであるのに対し、傾性理論は、色彩を傾性と捉えるかぎりにおいて、色彩を現象的特性(クオリア)とする理解を斥けることから、色彩に関する傾性主義と素朴实在論(原初主義)は真っ向から対立することになる。

(2)色彩はあくまで単純 (simple) で、モナド的 (monadic) で、局在的 (local) で、内在的 (intrinsic) な特性であって、関係的特性ではない

たとえば対象が赤く見えるとき、われわれはその対象を、対象の表面がもつ単純で、モナド的、局在的で、内在的な特性を具えたものとして見ているのであって、対象(の表面)と他の何らかの契機との間に成立する関係的特性として見ているわけではない。

ここで最初に押さえておかなければならないのは、傾性理論によれば色彩は関係的特性として捉えられる、すなわち傾性理論のもとで色彩と同一視される傾性はそれ自体が関係的特性としてある

### 色彩特性と物理的特性との関係 Ⅲ

という点である。この点について【DCDT2】をもとに確認しておくならば以下ようになる。

【DCDT2】によるならば、ここで問題となる傾性 D とは具体的に「色彩知覚条件 PC と主体の具える色彩知覚システム S との関係において対象 O のもつ特性」であるということになるが、このことから明らかなように、ここでは傾性は、色彩知覚条件 PC、主体の具える色彩知覚システム S、対象 O の三者間の関係において成立するものとして捉えられており、そのかぎりにおいてこれは紛れもなく関係的特性の一種であると見なされる。

さてこうした関係的特性としての傾性は、複数の項（具体的には、色彩知覚条件 PC、色彩知覚システム S、対象 O という三項）をその構成契機とするかぎりにおいて、モノダ的特性ではなく複合的特性であり、またそれが対象 O に局在するのではなく他の二項にも跨るものであるかぎりにおいて、局在的特性ではなく大域的 (global) 特性あり、さらには、対象 O から見て関係を構成する他の二項は外在するものであるかぎりにおいて、それは内在的ではなく外在的 (extrinsic) な特性であるということになる。したがって色彩を傾性と捉える傾性理論のもとでは、本稿における色彩に関する基本理解のうち(1)「色彩は内在的特性である」と(2)「色彩は単一的・モノダ的特性である」という二つの理解が斥けられることになる。

本章冒頭で再確認したように、(1)と(2)の理解は色彩に関する素朴实在論 (原初主義) 的な直観の内実を構成する要素となることから、(1)と(2)の理解が斥けられるということは、取りも直さず、傾性理論のもとでは色彩に関する素朴实在論 (原初主義) 的な直観が否定されることを意味する<sup>(4)</sup>。

以上のことから明らかなように、色彩に関する傾性理論の蔵する第二の問題もまた、第一の問題と同様、色彩に関する傾性主義と素朴实在論 (原初主義) との両立不可能性を端的に示すものと言える。

(3)色彩経験が色彩経験の志向対象となることはない

傾性理論によれば、たとえば赤の経験の志向対象は「われわれのうちに赤の経験を生み出す傾性」ということになるが、こうした理解のもとでは赤

の経験とは「赤の経験の経験」であるという背理が生ずることになる。この点に関して「対象 O は赤く見える」(=「対象 O は赤 [い色] をもつように見える」) という経験を例にさらに詳しく述べるならば以下ようになる。

【DRDT】によれば、「赤」とは「色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して赤と直接的に関連づけられる (たとえば「赤く見える」、「赤く感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ傾性」を意味することになるため、いま試みに「対象 O は赤く見える」の「赤」の箇所はこの DT 上の等価物を代入してみるならば、「対象 O は [色彩知覚システム S を具えた主体に対して赤と直接的に関連づけられる (たとえば「赤く見える」、「赤く感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす傾性] をもつように見える」という文が得られることになる。

この文操作が端的に示しているように、傾性理論によれば、「対象 O が赤いこと」を経験するとは、「対象 O が色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体との関係において赤と直接的に関連づけられる (たとえば「赤く見える」、「赤く感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす傾性をもつこと」を経験することを意味することになるが、こうした事態を経験するには、ここで問題となっている「色彩知覚条件 PC のもとである色彩知覚システム S を具えた主体に対して赤と直接的に関連づけられる (たとえば「赤く見える」、「赤く感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす傾性を対象 O がもつ」という関係を構成する「赤と直接的に関連づけられる (たとえば「赤く見える」、「赤く感じられる」) ような感覚反応 SR」という一種の経験を体験することが必要となる。しかしながら何かが赤いことを経験するとき、赤に関する経験が経験されることはない。つまり色彩経験は色彩経験の志向対象とはならないのである。

ここであらためて確認しておくならば、傾性理論から帰結するこの第三の問題を論ずるにあたってその暗黙の前提となっているのは、何かが赤いことを経験するとは、端的にその対象が赤いことを経験することであって、断じて赤に関する経験を体験することではないという理解である。色彩

経験に関するこうした理解は、本稿における色彩に関する基本理解(4)「色彩経験は表象的である」に直接関係するものと見なされる。すなわち、本稿1でも述べたように、色彩経験が表象的であるとされるとき、それが意味するところは、色彩経験は世界に実在する色彩、あるいは実在する対象の具える色彩を表象するという他に他ならず、したがって色彩経験の志向対象は、「何らかの色彩に関する経験」(たとえば「赤の感覚(経験)」)ではなく、あくまで「ある対象のもつ何らかの色彩」(たとえば「トマトの赤さ」)ということになるのである。

あらためて言うまでもなく、基本理解(4)は色彩に関してわれわれが抱く素朴实在論(原初主義)的な直観の内実を構成する要素のひとつに数えられるものであることから、この第三の問題もまたその淵源は、DTがわれわれの素朴实在論(原初主義)的な直観に抵触する点に求められることになる。

(4)色彩特性を傾性と捉えることによって生ずる無限背進<sup>(5)</sup>

傾性理論のもとで赤の定義を示した【DRDT】にしたがうならば、赤は以下のように定義的に説明されることになる。

①赤とは、色彩知覚条件PCのもとで色彩知覚システムSを具えた主体に対して赤と直接的に関連づけられる(たとえば「赤く見える」、「赤く感じられる」)ような感覚反応SRを引き起こす対象Oのもつ傾性である。

ここでは議論の流れを見通しのよいものとするために、この①を可能なかぎり簡略化したかたちで赤に関して以下のような定義的説明を与えることにする(こうした操作を加えたとしても以下の議論の基本的論理構制に何ら変化ももたらさないことは論を俟たない)。

①赤とは赤く見える傾性である。

いま仮にこの一文の定義項にあたる「赤く見える傾性」にある「赤」とは何かが問題になるとするならば、(少なくとも傾性主義の立場を貫徹するかぎりにおいて)この「赤」に①の定義項「赤く見える傾性」をそのまま代入することによって以下のような説明が与えられることになる。

②赤とは[赤く見える傾性]に見える傾性である。

この定義的説明の定義項「赤く見える傾性に見える傾性」に現れる「赤」がまたしても問題になるとすれば、この「赤」に①の定義項「赤く見える傾性」を再度代入することによって以下のような説明が与えられる。

③赤とは[[赤く見える傾性]に見える傾性]に見える傾性である。

その定義項にある「赤」とは何かが問題となるかぎりにおいて、「赤」に「赤く見える傾性」を代入する操作が以下際限なく繰り返されることになる。マッギンが指摘するように、「問題は、ある対象が端的に赤く見るとわれわれが言うことをDTが決して認めないという点にある」(McGinn [1996]: 543)と言える。

あらためて言うまでもなく、DTが頑なに拒否する、赤い対象を見るときその「対象が端的に赤く見える」という経験的事実こそまさに色彩に関する素朴实在論(原初主義)にとってその原点をなす根源的事実に他ならないのであるが、このことに直接関係する、本稿における色彩に関する基本理解を挙げるならば、それは基本理解(2)「色彩は単一的・モナド的特性である」と基本理解(5)「色彩の中核に位置するのはある種の現象的特性(クオリア)である」ということになる。すなわち、素朴实在論(原初主義)によれば、色彩とは現象的特性(クオリア)を核とするそれ以上分解(分析)不可能な単一的・モナド的特性に他ならないのである。

DTは、こうした色彩に関する素朴实在論(原初主義)的な理解を拒否し、色彩をあくまで傾性によって分析しようとすることで、その核をなす現象的特性(クオリア)を際限なく先延べする無限背進(infinite regress)へと陥ることになるのだが、まさにこの点にDTと素朴实在論(原初主義)との根本的対立を明確に看取することができ(6)。(7)。

#### 4.1.3 スーパーヴィーニエンス傾性理論の基本構制

前項における議論からも明らかなように、マッギンの挙げる傾性理論のもつ四つの問題はいずれも、傾性理論による色彩の理解が色彩についてわれわれが抱く素朴实在論(原初主義)的な直観に

### 色彩特性と物理的特性との関係 Ⅲ

抵触する点にその淵源を有するものであると言えるのだが、本節冒頭にも指摘したように、マッギンが「スーパーヴィーニエンス傾性理論」をあらたに提唱する背景には、傾性理論のもつ長所を生かしながらも、それが必然的に蔵する上記のような諸問題を回避することで、色彩に関する素朴實在論（原初主義）的な描像を傾性理論によって基礎づけるという問題意識があった。本項では、こうした問題意識のもとにあらたに打ち立てられた「スーパーヴィーニエンス傾性理論」の基本構制をマッギンの議論にしたがって順を追って確認してゆくことにしたい。

マッギンによれば、傾性理論が色彩に関する素朴實在論（原初主義）に真っ向から対立することになるのは、傾性理論が色彩を傾性と同一視する、もしくは前者を後者に還元することに起因するのだが、マッギンは、両者の根本的対立を解消することを目指して、傾性と色彩との関係を同一性や還元概念によってではなく、スーパーヴィーニエンス概念によって捉え返すことで、スーパーヴィーニエンス傾性理論の基本テーゼ「色彩は傾性にスーパーヴィーンする」を呈示する。マッギンは、このテーゼが具体的に意味するところのものについて以下のように述べている。

〔このテーゼによれば〕必然的に以下のことが成り立つ。すなわち、二つの対象が色彩経験を生み出す同じ傾性をもつとするならば、両者は同じ色彩をもつ。そして、二つの対象が色彩において異なるとするならば、両者はその傾性においても異なるに違いない。このように対象のもつ色彩は、その感覚的傾性（sensory dispositions）によって固定されるのであり、したがって、後者における変化なしに、前者における変化はありえないのである。しかしながらそれは、これらの共変化する（covarying）特性が数的に同一である（numerically identical）といった事態ではないのである。

（McGinn [1996]: 544）

この一節においてマッギンは、色彩と色彩経験を生み出す傾性との関係を前者の後者に対するスーパーヴィーニエンス関係として捉えるのであ

るが（ここに見て取れる色彩の傾性へのスーパーヴィーニエンス関係に関するマッギンの理解は、ある意味当然のことながら、本稿 3.2 に示したマクローリンらによるスーパーヴィーニエンス関係に関するスローガン〔松崎 [2018]: 62, McLaughlin and Bennett [2011]: 1, 3〕と完全に一致するものと言える<sup>(8)</sup>）、マッギンがスーパーヴィーニエンス概念を導入した最大の理由は、色彩と傾性とを同一視する、あるいは前者を後者に還元可能であるとする理解を斥けることにあったと考えられる。逆に言うならば、色彩と傾性との関係に関してマッギンが何としても堅持したかったのは両者の非同源性と前者から後者への還元不可能性であったと考えられるのである。

マッギンは、スーパーヴィーニエンス概念を導入することによって実現されたスーパーヴィーニエンス傾性理論のもつ利点について以下のように述べる。

こうしてわれわれは首尾一貫したかたちでつぎのように主張することができる。すなわち、色彩特性がスーパーヴィーンする特性は対象のもつ傾性的で（dispositional）、複合的で（complex）、関係的で（relational）、外在的な（extrinsic）特性であるという事実にもかかわらず、色彩特性それ自体は、対象のもつ確定的で（categorical）<sup>(9)</sup>、単一的で（simple）、モナド的で（monadic）、内在的な（intrinsic）特性である、と。

（McGinn [1996]: 544-5）

要するに、スーパーヴィーニエンス概念を導入することによって、色彩と傾性とを同一視する、あるいは前者を後者に還元可能であるとする理解を斥けることが可能となり、延いてはそれによって色彩に関する傾性主義と素朴實在論（原初主義）とを調停する道が拓かれることになるのであるが、まさこの点にスーパーヴィーニエンス傾性理論の最大の利点があると言えるのである。

マッギンは、スーパーヴィーニエンス傾性理論について四つの側面からさらに敷衍することでその擁護に努めるのであるが、以下ではそれらについて順に見てゆくことでこの理論についてさらに理解を深めることにしたい。

(1)「SDT は、世界全体にわたって (across the world) 何が色彩の分配 (distribution) を規定するかに関する形而上学的テーゼ (metaphysical thesis) であって、色彩語 (color terms) の指示作用 (reference) や色彩経験の内容に関する理論ではない」(McGinn [1996]: 545)。

ここでまず押さえておかなければならないのは、スーパーヴィーニエンス傾性理論は、色彩特性と傾性的特性 (さらには後段で取り上げる物理的特性) といった諸特性間の関係を問題にする形而上学的理論である、あるいは別言するならば、この理論は色彩がいかなる存在論的構造のもとに成立しうるかを明らかとする存在論的理論であるという点である。したがってスーパーヴィーニエンス傾性理論は、たとえば「赤」のような色彩語は何を意味するのか、すなわち「赤」の指示対象 (referent) は何かといった問題を考究する色彩語の意味論でもなければ、赤を経験する際のその経験内容は何かといった問題を扱う色彩に関する (フッサール流の) 現象学でもないということになる。

(2)「SDT は、傾性理論のもつ不都合な帰結を避けながらも、その長所は保持することをわれわれに許す」(McGinn [1996]: 545)。

あらためて言うまでもなく、「傾性理論のもつ不都合な帰結」とは、具体的には、本稿 4.1.2 で取り上げた四つの問題を指し、また「その長所」とは、同じ 4.1.2 で指摘した、色彩を主観的側面と客観的側面との両面から捉えることを可能にするという点であると言える (McGinn [1996]: 537)。

まず、SDT が傾性理論のもつ四つの問題を回避することができるという点について述べるならば、SDT がこれらの問題を回避しうるのは、端的に言うならば、SDT は色彩を要するに原初的・実在的特性 (その内実は本章冒頭に再掲した色彩に関する基本理解の(1)から(5)に他ならない) として捉えていることによる。

ついで SDT のもつ長所について、これまでの議論をもとにさらに詳しく述べるならば以下のようなになる。SDT によるならば、傾性的特性にスーパーヴィーンする特性はあくまで原初的・実在的特性であることから、色彩は対象それ自体の具える原初的・実在的特性ということになるが、しか

しその一方で、この原初的・実在的特性としての色彩がスーパーヴィーンする特性は、【DCDT2】をもとに捉えるならば、「色彩知覚条件 PCのもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる (たとえば「C に見える」、「C に感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ傾性 D」ということになるため、ここでは色彩はある色彩知覚システム S を具えた経験主体との関係においてはじめてそうした色彩として成立しうることになり、したがって、色彩帰属の真理 (the truth of color ascriptions) は主体の色彩経験に相対的であるということになる (McGinn [1996]: 545)。まさにその意味で、SDT は色彩を主観的側面と客観的側面との両面から捉えることを可能にするものと言えるのである。

このように SDT においては、色彩は対象それ自体の具える原初的・実在的特性として捉えられる一方で、色彩帰属の真理は主体の色彩経験に相対的であるという主張もまた保持されることになるのだが、マッギンは、色彩に関する SDT のこうした理解との関連で、色彩語の意味論について以下のように述べる。

SDT の考え方は、色彩語はそれ自体において論理的に関係的なのではなく、その適用は本質的に (inherently) 関係的な傾性によって統御されるに過ぎないというものである。

(McGinn [1996]: 546)

すなわち SDT によれば、色彩語、たとえば「赤」という語は、端的に対象のもつ「赤さ」という特性を指し示す、別言すれば、「赤」という語の指示対象は「赤さ」という特性であるということになるが、対象のもつある種の特性に「赤」という語を適用するか、あるいは「緑」という語を適用するかは、色彩知覚条件 PC と主体のもつ色彩知覚システム S との関係において色彩 C と直接的に関連づけられるような感覚反応 SR を引き起こす対象のもつ傾性によって統御されることによるのである。その意味でポーツも言うように、SDT は色彩に関して「単純な意味論 (simple semantics)」を受け容れるものと見なされることにな

る<sup>(10)</sup>。

(3)「SDTのもとで色彩と形態(shape)は、感覚的傾性(sensory dispositions)に対するそれらの関係においてある好ましいシンメトリー(pleasing symmetry)を示す」(McGinn [1996]: 546)。

ここでは、直接的にはロックに由来する「第一性質(primary quality)」と「第二性質(secondary quality)」という伝統的概念がSDTのもとでどのように捉え返されるかが問題となっている。周知のとおりロックによれば、第一性質とは、固体性、延長、形態、運動または静止、数のような観念をわれわれの心に生じさせる物体の性質を、また第二性質とは、第一性質によってわれわれのうちに色、音、味などの感覚を生じさせる「力能(power)」(もしくは傾性)を意味する(Locke [1853]:76-82)。第一性質と第二性質に関する標準的理解にしたがうならば、両者の本質的な相違は、第一性質がその知覚とは独立に対象それ自体の具える性質であるのに対し、第二性質はその適用条件のうちに知覚主体の感覚反応が組み込まれている点に存する(McGinn [2000]: 595)。

それに対しSDTによるならば、第一性質と第二性質はある種のシンメトリーを示すことになる。たとえば第一性質としての四角であるという特性が四角に見える傾性と同一化されえないのと同様に、第二性質としての赤であるという特性は赤に見える傾性と同一化されえないのである。

このように形態と色彩という二つの特性はいずれも「そのように見える」という傾性と同一化されえないという点で共通性をもつものの、傾性と同一化されえない理由は形態と色彩とではまったく異なっているという点は注意を要する。すなわち、形態と色彩とでは傾性に対するその存在論的依存(ontological dependence)<sup>(11)</sup>の方向が正反対となっており、形態特性に関して言えば、たとえば対象はそれが四角であることから四角に見えるよう傾性づけられる(disposed)のに対し、色彩特性の場合は、対象が赤く見えるから赤いのである(別言するならば、「対象が四角に見えること」は「対象が四角であること」に存在論的に依存するのに対し、「対象が赤い」ことは「対象が赤く見えること」に存在論的に依存する)。まさにその意味で第一性質としての形態と第二性質としての

色彩とは互いに「鏡像(mirror images)」関係に立つと言える。

(4)「SDTはスーパーヴィーンするもの〔色彩〕にとって必要十分条件を提供する」(McGinn [1996]: 546)。

SDTが色彩が成立するにあたっての必要十分条件(necessary and sufficient conditions)を提供するということは、取りも直さず、SDTが色彩に関して厳密な定義を与えうることを意味するが(SDTに依拠する色彩の定義に関しては、本項の最後にその定式化を試みる)、このことはSDTがいわゆる多重実現(multiple realisation)<sup>(12)</sup>の問題を回避できることに直接関係する。たとえば、「痛み」に関する「痛みは物理的状态にスーパーヴィーンする」という非還元物理主義(non reductive physicalism)の理解のもとでは、ある特定の痛みは異なる物理的状态によって実現可能である(マッギンの挙げる例で言うならば、「痛みは人間と火星人との間では異なったタイプの物理的状态にスーパーヴィーンするかもしれない」[McGinn [1996]: 546])ため、こうした理解のもとでは「多重実現」の問題が浮上してくることになるが、「赤さは赤く見える傾性にスーパーヴィーンする」というSDTの理解のもとでは、赤さは、赤く見える傾性以外の何ものにもスーパーヴィーンしえないことから、ここでは「多重実現」はそもそも問題となりえない。

この点を踏まえてマッギンは、色彩と傾性との関係について以下のように述べる。

スーパーヴィーンされる(subvenient)傾性的特性の同一性は、スーパーヴィーンする(supervening)特性の同一性からア・プリオリに演繹される。すなわち、ある対象が赤いことをあなたが知るとするならば、あなたはそれが赤として現出する、基盤となる傾性をもつことを推論しうるのである。このようにこの二つの特性は、すべての可能世界において概念的に結合されている。(McGinn [1996]: 546)

SDTによれば色彩特性と傾性的特性との両者は、前者から後者へのア・プリオリな演繹関係に立つと言えるのであるが、両特性が「すべての可



能世界において概念的に結合されている」とするならば、かてて加えて両者は必然的な関係にあるということになる。裏を返せば、SDT の理解では、色彩特性と傾性的特性という二つの特性はア・プリアオリで必然的な関係に立つからこそ、SDT は傾性概念をもとに色彩に関する厳密な定義を与えることが可能となるのである。

以上スーパーヴィーニエンス傾性理論についてさらに理解を深めることを目指して、このスーパーヴィーニエンス傾性理論に関するマッギンの注解的記述を検討してきたのであるが、そこでの議論をとおしてこれまで再三にわたって確認してきたように、スーパーヴィーニエンス傾性理論によれば、原初的・実在的特性としての色彩はわれわれのうちに色彩経験を引き起こす傾性にスーパーヴィーンするものと解されることになる。

それではそうした傾性自体は何を基盤として成立するのであろうか、そしてその基盤をなすものと傾性とはいかなる関係にあるのだろうか。以下ではこれらの問題をめぐってに考察を繰り広げることにした。

まず傾性は何を基盤として成立するのかという問題に関しては、McGinn [1996]からの以下の一節がひとつの明確な解答となる。

傾性理論を理解する最善の方法は、それを色彩特性は対象と知覚者との間の関係を構成する高階の心的-物理的特性 (higher-order psychophysical properties) であると主張するものと理解することである。たとえば、赤であるとは、知覚者のうちに赤の経験を生み出す特殊な二階の原因となる役割を果たす何らかの一階の物理特性 P をもつことである。対象が選別された知覚者 (selected perceivers) に経験を引き起こすよう傾性づけられているのは、基盤となる (grounding) 物理的特性 P をもつことによって (in virtue of) である。

(McGinn [1996]: 538-9)

(本来この一節は色彩に関する傾性理論について触れたものであるが、スーパーヴィーニエンス傾性理論が、その基本的理論構制において、傾性理論をそのひとつの構成契機として自らのうちに

組み込むものであるかぎりにおいて、ここに見られる議論は、直接先の問いに答えるものと見なされることになる) マッギンはここで、色彩経験の成立過程を一種の階層構造のもとに捉えている。それによれば、まず一階の物理的特性を基盤として知覚者のうちに色彩経験を生み出す傾性が成立し、ついでこの二階の傾性が原因となって三階の色彩経験が成立することになる。ここからもはや絮説を要せずとも明らかなように、われわれのうちに色彩経験を引き起こす傾性にとってその基盤をなすのは物理的特性であると言えるのである。

それでは、色彩経験を引き起こす傾性にとってその基盤をなす物理的特性とは具体的には何が具える物理特性なのであろうか。ここではこの問題について傾性理論にもとづく色彩の定義である【DCDT2】をもとに考えてみることにしよう。

【DCDT2】によれば、色彩 C と直接的に関連づけられるような感覚反応 SR を引き起こす傾性はあくまで対象 O のもつ特性であることから、傾性にとって基盤なす物理的特性は対象のもつ物理的特性であるということになる。しかしながら、たんにそれだけにとどまらない。【DCDT2】が明確に示しているように、ある対象が当該傾性を具えるのは、あくまで色彩知覚条件 PC と色彩知覚システム S を具えた主体との関係においてのことであるため、関係の特性としての傾性にとってその関係項をなす色彩知覚条件 PC と主体の具える色彩知覚システム S のもつ物理的特性もまた当該傾性にとってその基盤をなすものと考えられる。以上のことをまとめるならば、色彩経験を引き起こす傾性にとってその基盤をなすのは、色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 PC、主体の具える色彩知覚システム S の三者がそれぞれに具える物理的特性 (の集合) であるということになる<sup>(13)</sup>。

つぎに問題としなければならないのは、色彩経験を引き起こす傾性とその基盤をなす物理的特性との関係についてであるが、両者がいかなる関係にあるかという点についてマッギンは明言を避けている。しかしながら以下に掲げる一節は、この問題を考えるにあたってひとつの重要な示唆を与えてくれるものと見なされる。

相互に還元不可能ではあるものの、われわれが

### 色彩特性と物理的特性との関係 Ⅲ

区別した三種の特性、すなわち一階の物理的特性、二階の傾性的特性、スーパーヴィーンする (superveniently) 色彩特性は、色彩特性を頂点としてヒエラルヒー的に配列される。下位レベルの特性への依存 (dependence) にもかかわらず、実際のところ色彩は他のいかなるものにも同化しえない (not assimilable) 自己固有の存在論的クラス (an ontological class of their own) に位置づけられる。

(McGinn [1996]: 548)

ここでもまた先 (McGinn [1996]: 538-9) と同様、一階の物理的特性、二階の傾性的特性、三階の色彩特性という、色彩経験を可能とする階層構造が議論の下敷きになっているのであるが、この一節にある「下位レベルの特性への依存 (dependence)」という記述に注目するならば、二階の傾性的特性の一階の物理的特性に対する関係を依存関係として捉えることも可能となる<sup>(14)</sup>。この関連において注目したいのは、McGinn [1996] からの二つ前の引用 (McGinn [1996]: 538-9) にあったつぎの一文である。

対象が選別された知覚者に経験を引き起こすよう傾性づけられているのは、基盤となる物理的特性 P をもつことによって (in virtue of) である。  
(McGinn [1996]: 538-9)

マクローリンらの議論 (McLaughlin and Bennett [2011]: 17) に依拠して本稿 3.2 において論じたように (松崎 [2018]: 63-4)、A が B にスーパーヴィーンするとき、A が A であるのは B 「によって／のおかげで (in virtue of)」あるということを含意しないのに対し、A が B に存在論的に依存するとき、A は B 「によって／のおかげで」存在することを含意するのであるが、ここから推すならば、色彩経験を引き起こす傾性がその基盤となる物理的特性 P 「によって／のおかげで」そうした傾性としてあるとするならば、色彩経験を引き起こす傾性とその基盤となる物理的特性 P との関係は、スーパーヴィーンニエンス関係としてではなく、本来存在依存関係として捉えるべきであるということが明らかとなる。すなわち色彩経験を

を引き起こす傾性は物理的特性に存在依存すると考えられ<sup>(15)</sup>、したがって、色彩経験を引き起こす傾性とその基盤をなす物理的特性との関係は前者の后者に対する存在依存関係であると結論づけられることになるのである。

以上本項においては、McGinn [1996]におけるマッギンの議論を詳しく検討することで、スーパーヴィーンニエンス傾性理論の基本構制について考察を繰り広げてきたのであるが、本項の最後にこれまでの議論を踏まえスーパーヴィーンニエンス傾性理論にもとづく色彩の定義を定式化して示すならば、それは以下のようなものとなる。

【DCSDT】色彩 C = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる (たとえば「C に見える」、「C に感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ傾性 D にスーパーヴィーンする対象 O のもつ原初的特性 PP

この【DCSDT】に関して以下の二点の補足説明を付しておくことにしたい。

(1) 【DCSDT】の定義項にある「原初的特性 PP (primitive properties)」とは、本稿 1 に掲げた、六項目にわたる色彩に関する基本理解のうちその 1 から 5 の項目に直接対応するものであり、したがってそれは、具体的に言うならば、①内在的で、②単一的・モナド的で、③実在的で、④表象的 (志向的) で、⑤現象的な特性であるということになる。

(2) 【DCSDT】の定義項には、傾性理論にもとづく色彩の定義である【DCDT2】の定義項「色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる (たとえば「C に見える」、「C に感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ傾性 D」がそのままのかたちで組み込まれているが、このことはスーパーヴィーンニエンス傾性理論が傾性理論をその構成契機とすることを直接的に反映している。

さて、この【DCSDT】をより直観的に把握するためのひとつの方途として、いま仮に【DCSDT】に則したかたちで、スーパーヴィーンニエンス傾性理論にもとづく「赤」の定義を定式化して示すならば、それは以下のようなものとなる。

【DRSDT】赤 = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して赤と直接的に関連づけられる (たとえば「赤く見える」、「赤く感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ傾性 D にスーパーヴィーンする対象 O のもつ原初的特性 PP

註

(1) 別の箇所ではマッギンは、SDT を色彩に関する「印象主義 (impressionism)」と呼んでいる (McGinn [1996]: 547)。

(2) 傾性概念一般に関して詳しくは Choi and Fara [2014] を参照のこと。

(3) マッギンは McGinn [1983] において「赤い対象は傾性理論が分析するような仕方で見えることはない」(McGinn [1983]: 133) という問題 (端的に言えば、「赤い対象は赤く見えるのであって、赤の経験を引き起こす傾性として見えるわけではない」という問題) を取り上げているが、この問題は本文以下に挙げる、McGinn [1996] に指摘された傾性理論の蔵する四つの問題のうち(1)と(2)の問題に関連づけられるものと見なされる。

この問題に関して McGinn [1983] では、「～に見える (look...)」という表現が高度に内包的な性格を示すものであり、「～に見える」という表現が現れる文脈において色彩 (たとえば「赤さ」) を傾性理論の用語 (「赤の経験を引き起こす傾性」) で置き換えることはできないことを理由に、色彩を傾性として捉える DT の理解とそれを単一的で内在的な現象的特性と捉える素朴實在論 (原初主義) 的理解とは必ずしも両立不可能なわけではないとの主張がなされた (McGinn [1983]: 134-7)。

一方 McGinn [1996] においては、先の問題に関する McGinn [1983] における対処法に対して以下に示すような一種の自己批判が加えられる。

この問題に対してこのようなやり方で対処することはできないが、その主たる理由は、この方策 (maneuver) は DT が現象学的に誤っている、すなわち経験を引き起こす傾性としてわれわれが色彩を見ることはないという根本的な直観を回避するのには役立たないという点にある。 (McGinn [1996]: 538)

こうして先の問題に対する McGinn [1983] における対処法は斥けられ、この問題はそのままのかたちで残存することになる。

(4) 傾性としての色彩が局在的特性ではなく大域的特性であるという点に関しては、これを色彩が内在的ではなく外在的な特性であるということからの帰結として理解することも可能である。なぜならば、色彩が外在的な特性であるとは、色彩が対象 O とそれにとって外在的契機をなす色彩知覚条件 PC および色彩知覚システム S との三者間の関係において成立するという他に他ならず、色彩がこれら三者間の関係において成立するということが、これを別の角度から捉え返すならば、色彩が対象 O に局在するものではなく、対象 O、色彩知覚条件 PC、色彩知覚システム S の三者に拡がる大域的特性であるということの意味するからである。

(5) マッギンは註においてこの論点を Boghossian and Velleman [1997] から得たことを明らかにしている (McGinn [1996]: 544, n.7, Boghossian and Velleman [1997]: 88-90)。

(6) マッギンが McGinn [1996] に挙げた四つの問題とは別に、色彩に関する傾性理論の蔵する問題としてしばしば指摘されるものに「傾性理論による色彩の定義には循環論法の疑いがある」というものがある (因みに、McGinn [1983] ではこの問題が取り上げられている。McGinn [1983]: 6-8)。この問題を【DCDT1】に即して確認しておくならば、【DCDT1】において被定義項をなす「色彩 C」がその定義項にも現われている点に、循環論法の嫌疑がかけられるのである (この問題に対する主たる対処法としては、「非同一次性論法」と「意味論的非空虚論法」との二種の論法が挙げられるが、これらについて詳しくは松崎 [2011]: 114-5 を参照されたい。松崎 [2011] の主題はあくまで美的特性傾性理論にあるが、必要な変更を加えるならば [mutatis mutandis]、これを色彩傾性理論に関する議論として容易に捉え返すことができよう)。

因みに、【DCDT2】に関して言うならば、この定義は循環を免れていると言える。なぜならば、定義項の括弧内に現れる C はあくまである種の経験的覚知、すなわち「現象的見え/感じ」を指し示すものであって、色彩特性それ自体を指すものではないからである (実は【DCDT2】は、循環論法の嫌疑を斥けるべく「非同一次性論法」に依拠して色彩傾性理論を定式化したものに他ならない)。

(7) 以上の議論からも明らかなように、マッギンの挙げる色彩に関する傾性理論が蔵する四つの問題の要点は、そのいずれもが何らかの点で色彩に関する素朴實在論 (原初主義) 的理解と真っ向から対立することにあると言えるが、色彩に関する素朴實在論 (原初主義) 的理

### 色彩特性と物理的特性との関係 Ⅲ

解がまさに色彩に関するわれわれの常識的理解の中核をなすことから、色彩に関する傾性理論はマッキーの言う意味での「錯誤理論 (error theory)」に通ずることになる (Mackie [1990]: 35, 48-9, cf. Crane and French [2016]: 47)。

この点に関してマッギンはつぎのように述べている。

[DT のもつ] 困難は、有り体に言えば、色彩特性は色彩経験を生み出す傾性のようには到底見えず、したがって色彩知覚に関する錯誤理論が避けられないように思われることになるという点にある。[すなわち] 色彩は、傾性的にそうあると言われるような仕方では見えないという結果にいたるが、このことは通常の色彩知覚は本質的に (intrinsically)、大々的に (massively) ミスリーディングであると言うに等しいのである。 (McGinn [1996]: 537, see also 539-40)

(8) スーパーヴィーニエンス関係に関するマッギンの理解が本稿 3.2 に挙げたマクローリンらによるスーパーヴィーニエンス関係に関するスローガンと完全に一致することを確認しておくならば、以下ようになる。

マクローリンらによるスーパーヴィーニエンス関係に関するスローガンは以下のようなものであった。

① A 特性は B 特性にスーパーヴィーンする ≡ B 特性に関して異なることなしに、A 特性に関して異なることはありえない

① の A 特性を色彩と、また B 特性を傾性と取るならば、② の式が得られる。

② 色彩は傾性にスーパーヴィーンする ≡ 傾性に関して異なることなしに、色彩に関して異なることはありえない

一方、② の式の右辺をその対偶と置き換えるならば、

③ の式が得られる。

③ 色彩は傾性にスーパーヴィーンする ≡ 色彩に関して異なりうるならば、傾性に関して異なる

McGinn [1996] からの引用にあった「二つの対象が色彩経験を生み出す同じ傾性をもつとするならば、両者は同じ色彩をもつ」という一文は、実質的に②の右辺と同義の内容をもつものと考えられ、また「二つの対象が色彩において異なるとするならば、両者はその傾性においても異なるに違いない」という文は、実質的に③の右辺と同義の内容をもつものと考えられる。

以上のことから、スーパーヴィーニエンス関係に関するマッギンの理解はマクローリンらによるスーパー

ヴィーニエンス関係に関するスローガンと完全に一致することが明らかとなる。

(9) “categorical” は “dispositional” の対義語に当たり、そのかぎりにおいてこれを「無条件的」と訳出することもできる (cf. Choi and Fara [2014]: 19-20)。すなわち、本項 4.1.1 に指摘したように、傾性は反事実条件文 (counterfactual conditional) のもとに分析されるのに対し、“categorical” な特性は直説法の文 (indicative sentences) によって示されるのである。

(10) ポーツは、この「単純な意味論」を以下のように定式化している。「a は C である」という色彩帰属 (color attribution) は a が原初的 C を具現化するとき、その場合にかぎり真である (「a」は対象、もしくはその表面を、また「C」は色彩を指す) (Pautz [2006]: 24)。

(11) 本稿 3.1 に指摘したように、「存在論的依存 (ontological dependence)」は「存在依存 (existential dependence)」と基本的に同義の用語と見なされる (松崎 [2018]: 59)。

(12) 「多重実現」について詳しくは Bickle [2016] を参照のこと。

(13) マッギンは傾性理論を「色彩を対象と知覚者との間の関係によって構成されたものと見なす」「二重傾性理論 (double dispositional theory)」として捉え返すのであるが、この二重傾性理論のもとでは、われわれのうちに色彩経験を引き起こす傾性にとってその基盤をなすのは、たんに「視覚の外的対象 (the external object of sight)」のもつ物理的特性ばかりではなく、「知覚者の神経系のもつ物理的特性 (the physical properties of the perceiver's nervous system)」もまたそうした基盤をなすものと見なされることになる (McGinn [1996]: 539)。

(14) 無論たんにそれだけにとどまらず、この「下位レベルの特性への依存 (dependence)」という記述から、三階の色彩特性の二階の傾性的特性に対する関係もまた依存関係であるということが帰結することになる。このことが示唆するのは、マッギンが、われわれが本稿 3.2 でおこなったようにスーパーヴィーニエンス関係と (存在) 依存関係を厳格に別個の関係として捉えるのではなく、スーパーヴィーニエンス関係を依存関係の一種としてより緩やかに捉えているということである。この点は、本項前段に指摘したように、マッギンがスーパーヴィーニエンス概念を導入した最大の理由が、色彩と傾性とを同一視する、あるいは前者を後者に還元可能であると理解を拒けることにあったことから裏づけられる。なぜならば、色彩と傾性との非同一性、前者

の後者への還元不可能性は、両者の関係を依存関係と捉えることによっても当然ながらそのまま保持されることになるからである。

(15) 色彩経験を引き起こす傾性とその基盤をなす物理的特性との関係をたんなる依存関係としてではなく存在依存関係 (relation of existential dependence) として捉えるにあたってそのひとつの論拠となるのは、マッギンが色彩を「他のいかなるものにも同化しえない自己固有の存在論的クラスに位置づけられる」(McGinn [1996]: 548) ものと見なしている点である。なぜならば、色彩に関するこうした理解は、そもそも色彩という特性を一種の存在者 (entity) として捉えることによってはじめて可能となるものであり、その際その大前提をなすのは特性一般を一種の存在者として理解する立場であると見なされるため、傾性 (的的特性) と物理的特性もまたここでは一種の存在者として捉えられていると解されるからである。

#### 参考文献

- Bickle, John. [2016]. "Multiple Realizability." Edward N. Zalta (ed.). *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2016 Edition). URL = <https://plato.stanford.edu/archives/spr2016/entries/multiple-realizability/>.
- Boghossian, P. A. and Velleman, J. D. [1997]. "Colour as a Secondary Quality." *Mind* 98 (1989): 81-103. Reissued in: Byrne and Hilbert [1997]: 81-104.
- Byrne, A. and Hilbert, D. R. [1997]. *Readings on Color, Vol. 1: The Philosophy of Color*. Cambridge / London: MIT Press.
- Choi, Sungho and Fara, Michael. [2014]. "Dispositions." Edward N. Zalta (ed.). *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2014 Edition). URL = <http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/dispositions/>.
- Cohen, Jonathan. [2009]. *The Red and Real: An Essay on Color Ontology*. Oxford / New York: Oxford University Press.
- Crane, Tim and French, Craig. [2016]. "The Problem of Perception." Edward N. Zalta (ed.). *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2016 Edition). URL = <http://plato.stanford.edu/archives/spr2016/entries/perception-problem/>.
- Hardin, Clyde L. [1988/1993]. *Color for Philosophers*. Indianapolis: Hackett.
- Locke, John. [1853]. *An Essay concerning Human Understanding*. 31st rev. ed. London: William Tegg. 1st published in 1689.
- Mackie, John Leslie. [1990]. *Ethics: Inventing Right and Wrong*. First published in Pelican Books 1977. London: Penguin Books.
- McGinn, Colin. [1983]. *The Subjective View*. Oxford: Clarendon Press.
- . [1996]. "Another Look at Color." *The Journal of Philosophy* 93: 537-55.
- . [2000]. "Secondary Qualities." Edward Craig (ed.). *Routledge Encyclopedia of Philosophy*. London: Routledge, 595-9.
- McLaughlin, Brian and Bennett, Karen. [2011]. "Supervenience." Edward N. Zalta (ed.). *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2014 Edition). URL = <http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/supervenience/>.
- Pautz, Adam. [2006]. "Color Eliminativism." Ms., University of Texas, Austin.
- 松崎俊之. [2011]. 「美的特性に関する傾性理論—その美的特性実在論としての可能性を探る」、『石巻専修大学研究紀要』第 22 号、109-23 頁。
- . [2017]. 「色彩特性と物理的特性との関係 I」、『石巻専修大学研究紀要』第 28 号、43-54 頁。
- . [2018]. 「色彩特性と物理的特性との関係 II」、『石巻専修大学研究紀要』第 29 号、59-72 頁。